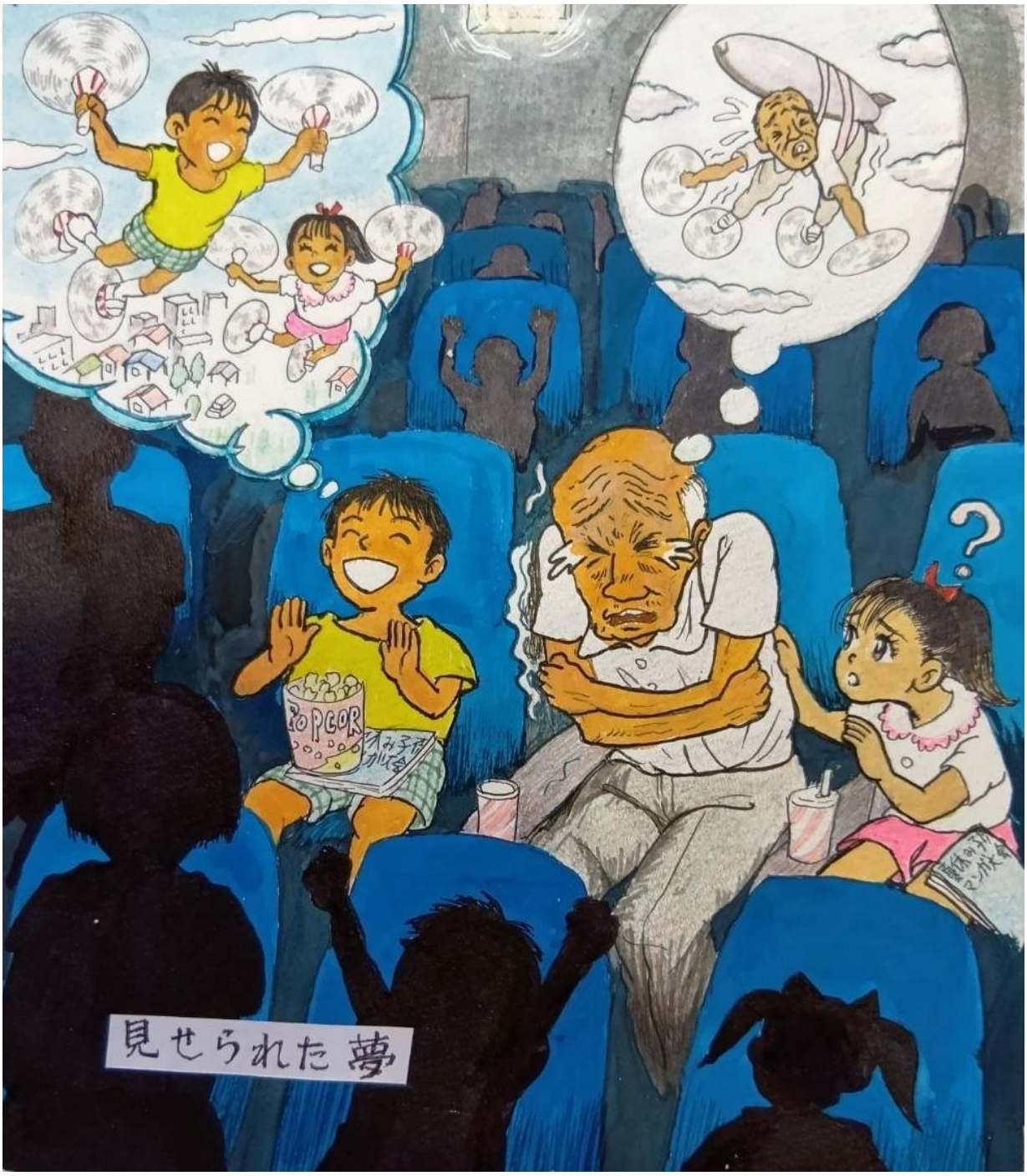
月刊

JMITU

ディスカ



8月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2025年発行

No,488

労働組合とは

私たちは、ＪＭＩＴＵセガグループ分会です。セガ及びセガグループ各社で働く仲間の労働組合です。

ＪＭＩＴＵとは

ＪＭＩＴＵ（日本金属製造情報通信労働組合）は、鉄鋼、金属製品、一般機械、電気機器、自動車、造船、精密機器、ソフト産業など金属、コンピューター、情報機器関連産業の労働者・労働組合が集まってつくられている全国組織です。働く者の権利を守る立場をつらぬき、会社の言いいなりの組合、いわゆる会社派組合ではありません。

労働組合は、その会社で働く労働者が、団結して職場環境や労働条件を改善し、雇用の安定と公正な待遇を求めるための重要な組織です。日本では憲法第２８条で「団結権・団体交渉権・団体行動権」の三権が保障されており、労働組合はその実践の場として機能しています。

労働組合の主な役割

賃金・労働条件の改善

労働時間、休憩、休日、有給休暇、賃金体系、福利厚生などについて、春闘や秋闘で会社と団体交渉し、労働協約を締結することで、要求を実現することも可能です。

不当な扱いへの対応

不当解雇、リストラ、パワハラ等の各種ハラスメント、サービス残業など労働者の不当な扱いに対して、会社と交渉・是正要求をしていきます。

労働委員会への救済申し立てや、法的支援も行います。

私達労働組合は、過去セガ隔離部屋問題においては、会社と裁判でも闘いました。

社会的な政策提言

私たちの生活は、会社とだけの交渉では良くならないこともあります。消費税減税や物価高対策、最低賃金、社会保障、育児・介護制度など、政府への要請活動も行っています。

過去には、賃上げや福利厚生の要求を「経営の負担」として捉えたり、団体交渉や組合活動を「非効率」や「対立」と見なしたり、組合との過去の紛争がトラウマ化し、労働組合を敵視する経営などもありました。

今は会社も組合を敵視できなくなりました。

組合を受け入れることにより、組合との定期的な交渉で、従業員の不満を把握することが出来、コンプライアンス強化、早期に把握解消ができ労使関係の安定化が見込める。

労働環境の改善が進み従業員の定着率が向上する。

従業員の声を反映した業務改善提案が増え、現場の効率が上がり生産性が向上する。

組合との協議を通じて、労働違反のリスクを事前に回避できる。

秋闘年末一時金要求

私達労働組合は１０月に、秋闘・年末一時金について、会社へ要求を提出します。

秋闘では、職場環境改善や非正規労働の方の処遇改善などを中心に要求をしていきます。

また年末一時金についても、会社は年末一時金の数字を変えてきません。利益が出たら夏季一時金でという考えですが、今の物価上昇の中ではそんなこと言っていられません。

掌編小説

板

仙洞田一彦

彼は団地の同じ棟に住むが、階は違う。彼の姿は夏冬一年中同じ、黒っぽい長そでシャツに黒っぽいズボンのようだ。傍目には同じように見えるかも知れないが、夏は通気性のあるもの、冬は保温性の高いものと、ちゃんと質が違うものを着ているかもしれない。そうでないと、ここんところの暑さでは、一見頑丈そうに見える彼でも、熱中症にやられてしまう。

いつも元気という表情ではないが、今日は、よりいっそう不満を内にためたようにムッとした顔をさらしていた。

飾る相手でもないし、お世辞を言う相手でもないので、私は印象そのままに推測し、言った。

「失業でもしたの」

「そうなんですよ」

あてずっぽうに言ったら図星だったので、言った私の方がびっくりした。彼が続けた。

「もうすぐ七十歳ですからね。職が見つからないですよ」

彼も飾らずに答えた。

バス停でバスを待ちながら、たまたま私の後に付いた彼との会話だ。日陰にはなっているものの朝の十時ごろというのに、すでに耐えられない暑さだ。いつもなら昼食後、散歩がてらうちから歩いて行く用事なのだが、そうは行かない暑さ。私としては特例の午前中のお出かけだ。

「そうでしょうね」

他に言葉がなかったので、彼の言葉に、そう答えた。

「職が見つからなければ生活保護だな」そう言って、彼は話題を転じた。「私なんかが貰う給料より、生活保護を貰った方がいいらしいですよ」

「え」

私の口から一言出たが、後の言葉が出なかった。

そこにバスが来たので、会話が途切れてバスに乗った。席はあったが、彼と並んで座り、会話の続きをしたくなかった。話題からすると、生活保護受給者への悪口になりそうだからだ。二人横並びの席にすでに一人座っているところを選んで座った。さいわい、別々、離れたところに腰かけることになった。

彼の発言はそこまではっきり言ってはいないが、言葉の調子では、働けるのに、働かないで、生活保護で楽して暮らしているように聞こえる。

私は子供の頃を思い出していた。小学校の四年から六年頃のことだ。父が結核で入院していたので、生活保護を受けていた。子どもの実感からしても、生活保護のくらしはそんなに生易しいものではなかった。

正月、祖母、おじ、おばからもらったお年玉も、食費になった。ポチ袋のまま机の引き出しに入れておくと、いつの間にか、袋だけで中身がなくなっていた。

母に聞くと、母も使ったことを隠さない。私もはじめのうちは抗議して泣くが、どうにもならない。繰り返されれ

ば、子供心にも仕方のないものだと思ってしまう。だからお年玉で何かを買ったとか、予期せぬお小遣いをもらって普段買えないようなおもちゃを買った記憶もない。

お年玉で食べるうどんだって、しょうゆの色のついたおつゆで煮ただけで、おかずは何もなかった。母と私と弟二人のうどんは、何玉分で、いくらだったのか。

そんな話をした時、「もっと貧しい人もいた」と言われたことがあった。

私の話が苦労の自慢話のように聞こえたのだろうか。もっと貧しい体験をしていた人が聞けば、その程度かと、そう思われたかもしれない。

自慢話ではない。もう一つ話を追加する。

おそらく小学校六年生の時だったと思うが、授業で塵取りを作ることになった。それで、板を持ってこいということになった。

私は、家にある廃材を持って行った。廃材は、うちの目の前にある高校の校舎の建て替えで出たものだ。飯はかまどで炊いていたから、そのために貰って来てあったのだろう。金を払ったとは思えない。

教材に使う板の出費も節約ということだ。未だに、その廃材の中から父が板を選んでいる姿が思い浮かぶ。しかも、その父が寝間着姿なのだ。結核療養中なので、記憶の中で合成されたのか、あるいは実際そうだったのか分からないが、寝間着姿が脳裏に浮かぶ。

他のみんなは、白い板を持って登校していた。私のはこれまで陽にさらされているから白っぽく、かつ濃い茶色とでもいうような色だった。みんなの板は触れれば湿り気を感じる板だったが、私のは乾燥しきっていて、年輪と年輪の間がへこんでいる。

廊下を歩いている時、いきなり怒鳴られた。別のクラスの担任の先生だった。

「どこから、剥いで来た」

私たちのいた校舎も、高校と小学校の違いはあるけれど、板の色はまったく同じだ。空襲の焼け野原の後、同じ時期に建てたものだからだろう。

私の塵取りは完成しなかった。世の中、下を見ればきりがない。大人になったらわかる。子供だった私は、理不尽さに泣くのみだった。それが生活保護のくらしだった。

その感覚が芯にしみついているのだろう。彼の言うように不正をして、楽な生活をしているように言われると、その言葉が突き刺さり、反発心が沸き起こる。

不正をしている奴がいるかもしれないが、だからといって、下を見て生きよ、貧しい者同士、いがみ合って生きよ。間違っても団結、連帯なんて考えるなよ――と言うわけにはいかないのだ。

バスが終点の駅前に着いた。後から降りた私は、彼はどこかと目で追ったら、横断歩道を渡っていた。生活費を稼ぐためだろうか、その先にあるパチンコ店に姿を消した。

「職が早く見つかるといいね」

彼の後姿に、つぶやいた。